EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

友の会会報

No. 4
平成13年
2001
12

発行／江戸東京博物館友の会事務局　130-0015東京都墨田区横網1-4-1　Tel. 03-3626-9910

新企画登場

～もっと、江戸がおもしろくなる～
古文書講座（入門コース）が開講

「古文書講座（入門コース）」（全3回）

・開催日：①1月11日(金)、② 2月15日(金)、③3月15日(金) の3回連続
・時間：いずれも14:00～16:00　　・申込締切：12月15日(土)必着

・講師：学習院大学大学院史学専攻（近世）
　野尻泰宏、小宮山敏和、西村慎太郎の各氏（講義順）
・会場：江戸博・1階学習室2　　・参加費：1,000円（3回分、初回払い）
・定員：30名（連続講義ですので3回すべて出席できる方）、会員限定

会員の皆さんからご要望がありました、「古文書講座」が開催されます。今回は「入門コース」で、古文書の基礎知識や、くずし字の基本的な読み方などを学習します。

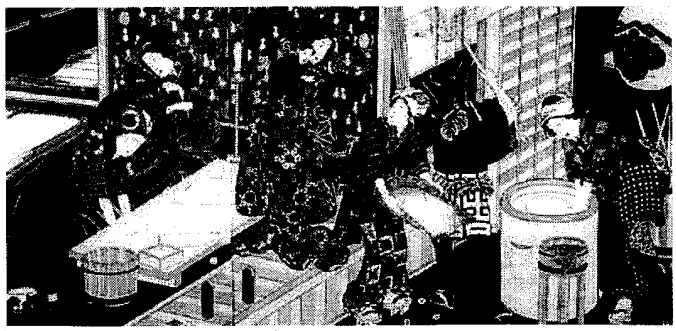
江戸時代の文書は、草書体のくずし字や、「無御座候（ござなくそうろう）」のような候文で書かれていました。古文書の基礎をしっかり身に付けて、文字を解読し、内容を理解することによって、江戸の新たな発見や興味が広がるでしょう。

友の会セミナー、申込方法などは4頁をご覧ください。

ハ・イ・ラ・イ・ト

- 友の会1年目の歳の瀬、活動にご協力御礼申し上げます。
- 新企画「古文書入門講座」
- セミナー講演要旨
  「幕末の異文化体験～長崎阿蘭陀通詞の蝦夷地紀行」
- 会員のページ—投稿など紹介
  ・会報新名称［えど友］に決定
  ・投稿「最後の与力・最初のクリスマス」巻渕 彰
  ・テーマ投稿「私と江戸」募集
- 《事業部会だより》
  今後の企画案内です。皆さんの参加をお待ちしています。
  ・1/25 第4回友の会セミナー
- 会員優待のお知らせ——
  ・「東京建築展」好評開催中！
  ・ミュージアムショップ特別割引
- この会報は、皆さんと一緒に創るコミュニケーション誌です。ご意見、ご要望、投稿などをお寄せください。

江戸歳時記



師走十二月之内　餅つき　歌川豊国(三代)画　江戸東京博物館所蔵
12月15日ごろから正月の餅つきの音が響く。ほとんどの家では、「引きずり餅」といって、町内の鳶や人足らに家に来てもらい、餅をついてもらった。鏡餅を作ったり、大根おろしなども用意されている。

おわびと訂正

本誌前第3号「役員紹介」掲載の訂正です。
誤：「会計・佐藤扶美子、監事・栗国ゆう子」
正：「監事・佐藤扶美子、会計・栗国ゆう子」
ここに、おわびして訂正申し上げます。

第2回江戸東京博物館友の会セミナー要録(2001/9/21)

幕末の異文化体験

―長崎阿蘭陀通詞の蝦夷地紀行を読む―

北海道教育大学岩見沢校助教授　谷本 晃久

日本列島の歴史を見渡しますと、その文化は①北海道・東北を舞台にした「北の文化」、②本州・四国・九州の「中の文化」、③沖縄を中心にした「南の文化」の3者で織り成されてきました。

そして江戸時代には①は、②の伝統によって成立した江戸幕府という近世国家のなかで、「内なる異域」と位置づけられていました。

蝦夷(えぞ)地(北海道)にはアイヌの人々による社会・文化が展開し、その後背には千島アイヌ、樺太アイヌ、ウィルタ、ニブヒなどの諸民族の世界が広がり、さらにロシア帝国や清朝の支配領域が控えているという状況でした。

そうした時代に、名村五八郎というひとりの阿蘭陀(オランダ)通詞が初めて蝦夷地に赴いて、何を見て、どう感じたか。彼が残した日記から見ていきましょう。

◆樺太南端地へ134日間の全記録

名村五八郎、名は元度(もとのり)、長崎で阿蘭陀通詞を世襲してきた家柄の出身。文政9年(1826)生まれで、明治9年(1876)に49歳の若さで亡くなりました。

彼は21歳のときに阿蘭陀通詞の列に加わりました。オランダ語のみならず、英語にも通じていたことで、嘉永7年(1854)の「日米和親条約」締結に際しては幕府の通訳として条文の翻訳にあたっています。

なぜ蝦夷に赴いたのでしょう。この前年にロシアのプチャーチン提督が長崎に来て、日露国境交渉が行われました。このとき樺太の領有権で、長崎で交渉していてもラチがあかない、と現地へ行って調査することになりました。見分役人の通詞として白羽の矢が名村五八郎に立てられ、出立したのは嘉永7年(1854)3月18日、28歳の時でした。

――

名村が残した日記は『蝦夷并(ならびに)カラフト島　野日記』。野日記とは、いまでいうフィールドノート、つまり現地で日々のことを書き記したものです。

名村五八郎(28歳)　E・ブラウン・ジュニア撮影。安政元年(1854)、横浜で撮影されたと思われる肖像。銀板写真なので左右逆像に注目。
―『幕末・写真の時代』筑摩書房発行1994

名村の旅は、神奈川を発ち江戸を経て奥州街道を一路北へ進み、松前に船で渡り、日本海側を江差・余市・石狩・留萌・天塩と北上して、宗谷岬に着きました。さらに北蝦夷地(樺太)最南端のシラヌシ(白主)からクシュンコタン(久春古丹、豊原)まで行きました。当時この地ではロシアが兵を駐屯させて、紛争が起こっていたからです。

現地に着いた時はロシア兵が退去した後でしたが、オランダ語で書かれた2通の書簡を残していました。松前藩主に宛てたものと、幕府に宛てたもので、名村は急遽(きょ)その翻訳にあたりました。これは名村ならではの任務のハイライトです。

公務を終え、箱館に戻ったのは閏7月29日で、その間134日間の旅でした。

◆「蝦夷地」で体験した異文化とは

日記には公務のことのほか、彼が見て、感じたものが記されています。

食事に関してこんな記述があります。「熊肉を少々得たり。昼食の折り炙(あぶ)り食う、初て生熊を味、美なり」、「付添いの足軽、鹿肉を得しとて夕食に出す、味噌煮にして用ゆ、初て生鹿を食う、味美にて淡白」。熊肉や鹿肉という「未知の味」について、彼はこう淡々と書いています。異域の食文化に対して、率直な記述で、彼の人柄がしのばれます。

故郷の味への思いも、「予、長崎を出てより今日まで1年。懐かしく思い、運上家(商人の出張所)より素麺を買い求めて湯麺とし、僕(従者のこと)とともに用い、心悦す」。郷愁を示す一方で、異郷の味も受け入れる見方ができる人だったわけです。

女性の風俗に関しても、きわめて客観的な見方が感じられます。「土婦四五人薪を背負ひ運上家に到る。皆耳環を付、俗に云 カラフト青玉を両耳に垂る」、「此所、土婦のうち両腕に真鍮様の環を入る」。

耳環(ニンカリ)というのは、イヤリングではなく、ピアスです。また、真鍮様の環はブレスレットで、アイヌ語で「テクンカニ」といいます。風俗も「中の文化」にはない、北方民族に特有のものでした。

その一方で、異なる文物に接して、無意識のうちに「内地」と比較する視線がなかったわけではありません。アイヌの文物を一段と低く見てしまう見方がそれです。名村五八郎は「中の文化」の人として無意識のうちにそうした視線を向けていたわけで、異文化への認識を考える上で現代にも通じる課題といえるでしょう。　【記録:広報部会・大松 騏一】

友の会会員のページ

江戸友ぷらざ

最後の与力・最初のクリスマス

巻渕　彰（会員）

江戸の治安を司った町奉行所の与力・同心は、明治維新を契機に幕藩体制から180度の転換を求められた。江戸から東京へ――移り行く時代変化の中にあってクリスチャンとして、更生保護事業などに活躍した、ひとりの元八丁堀与力がいた。

「八丁堀の旦那」で知られる与力・同心は、江戸八丁堀（現中央区八丁堀から日本橋茅場町の辺り）に組屋敷を拝領していた。与力25騎と同心130人ほどが組になり、それぞれ南町と北町の両奉行所に勤めた。職務は今風に言えば江戸の行政、警察、司法を担当していた。そんなことで町人からは八丁堀風（姿）の町方（役人）と呼ばれて、頼られ、守られ、怖がられた…特別の存在であった。

ここに登場する与力もそんなひとりである。嘉永6年（1853）、“八丁堀の鬼”といわれた与力・佐久間家に生まれ、下総手賀・原家の養子になり、13歳のときに与力になったその人物は、原胤昭（はら・たねあき）である。

時は変わって原の新展開が始まる。明治元年維新時、一時は新政府の役人になったが、のちに横浜で勉学して、明治7年（1874）21歳のとき築地居留地（現中央区明石町）の米国宣教師カローザス（カラゾルス、カロゾルスの表記も）の英学塾に入り、キリスト教の洗礼を受けた。

与力がキリスト教に傾注していった思いは何か、興味あるところである。原家の祖先には切支丹武士がいたという、こういう背景があったのかもしれない。キリスト教に関心を持って研究に事欠かなかった、とも書物に記されている。

受洗はその年の10月18日であった。これを感謝するために祝うことを考えた原は、師の指導のもとに祝会を準備した。十字架をミカンで飾ったが、それはカトリックのすることだ、と米国公使館員に諭され取りやめたという。造花を飾ろうと浅草蔵前から仲見世あたりの花かんざし屋で買い集めて、ツリーのように飾り付けた。

落とし幕は近くの芝居小屋、新富座（現中央区新富、京橋税務署付近）から借りてきて、さらに座付きの若い衆までが提灯の飾りを手伝ったとか。新富座は八丁堀からもすぐのところ、旧幕時代の与力の権勢があったからこそできたことか。そしてこの感謝を祝う会は、**わが国はじめてのクリスマスである**、といわれている。ではサンタクロースは？　袴をはいた殿様風の武士の扮装（ふんそう）をした原だったそうだ。

活動はここから本格化していく。

日本最初のキリスト教書籍店開業、同じくキリスト女学校の創設。自由民権運動弾劾に反対して自らが石川島監獄（旧人足寄場）に投獄されたが、出獄後は獄内の惨めな処遇に、監獄改良と免囚事業に生涯をかける決心をして、これまた日本初のキリスト者教誨師になった。

その後も出獄者保護所を設置するなど、救援された者は1万人を超えるという。原は昭和17年（1942）太平洋戦争のさなか、90歳で生涯を閉じた。

幕末から明治維新を経て昭和前期（戦前）までの時代を、与力から転身してキリスト教奉仕者として社会事業に専念した、強い意志と信念を持った江戸南町奉行所最後の与力が原胤昭であった。

会報の愛称が《えど友》に決まりました。

皆さんと友の会をつなぐ友の会会報の愛称募集に多数のご応募をいただきありがとうございました。

選定の結果、永井登美子さんと巻渕彰さん応募の**『えど友』に決まりました。名称は「江戸博友の会」を端的に表現し、親しみやすい、明快な響きがあります。**

新年号（第5号）からこの名称で発行していきます。皆さんと一緒に育てていきましょう。ご期待ください。

佳作には「みやこどり」（折笠重幸さん）、「メガロポリス」（野坂紘子さん）、「大川端」（菅沼和男さん）が選ばれました。入選の方々に記念品を贈呈いたします。

～テーマ特集～

「私と江戸」の投稿募集

皆さんの声をもとにテーマ特集を企画しています。今回のテーマは「私と江戸」。身の回りの江戸文化や江戸情緒、町の話題、趣味や関心事、疑問質問など、“あなたと江戸”に関連した事柄を寄稿ください。

○

◆テーマ投稿要領――春号で特集予定です。
短文（400字以内）を、手紙かハガキで投稿。イラスト・図や写真も歓迎。採用分には記念品進呈。
応募締切：1月31日。会員番号、住所、氏名、電話番号を明記。友の会事務局「投稿」係あて。

◆…友の会へのご意見、ご希望や随筆、詩歌、写真、イラストなども、随時、投稿をお待ちしています。

事業部会だより

友の会セミナー

第4回「式亭三馬の広告双六」 講師：岩城 紀子・江戸博学芸員

開催日：1月25日(金) 18:00～19:30／申込締切：12月15日(土)必着

◆

・会場：江戸東京博物館・1階学習室
・定員：100名(会員本人に限る)　・参加費：200円(当日払い)

江戸時代、お正月の定番であった絵双六。新春の江戸の町には双六売りも現れ、賑わいに花を添えました。さまざまな情報を絵と文字で表現でき、なおかつ遊んで楽しめる絵双六は、広告としても有効な媒体でした。初売りの景物として、人気の戯作者や浮世絵師に頼んで、オリジナル双六を作り、得意客に配る商店も多くありました。

今回は、『浮世風呂』などの作者であると同時に、薬店も営んでいた戯作者・式亭三馬とその息子・小三馬が、自分の店の宣伝のために作った広告双六を中心に紹介します。

・講師略歴：いわき・のりこ
1964年東京生まれ。専門は日本近代史。絵双六を素材に、江戸から明治・大正にかけての庶民意識の変遷をテーマに研究。江戸東京博物館企画展「葛飾北斎」「絵すごろく展―遊びの中のあこがれ―」などを担当。

●友の会セミナー・スケジュール

回	開催日	講師
第5回	平成14年2月2日(土)	藤實久美子(学習院大学史料館助手)
第6回	平成14年2月16日(土)	小澤 弘(江戸東京博物館教授)

講座受講申込方法

▲申込方法：
往復ハガキに《**開催日「テーマ名」応募**》と、①会員番号②氏名③〒住所④電話番号⑤会報、友の会の感想・要望、を明記。
・**各講座ごと、会員本人に限り、1人1通。**
・「返信用の〒あて先」も必ず記入ください。

▲申込先：130-0015東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局あて

▲締め切り：各講座案内を参照(必着)
申し込み多数の場合は抽選

会員優待のお知らせ

友の会会員の皆さんにお贈りする、会員ならではの特別優待サービスです。江戸東京博物館で、企画展やイベント観賞、ショッピングをお楽しみください――。

【企画展】東京建築展
―住まいの軌跡／都市の奇跡―

好評開催中！　平成14年1月20日(日)まで

会員観覧料：　大人450円、小中高生220円
会員の同行者：　大人720円、小中高生360円
*65歳以上の方は無料。

- 会員は、図録(3000円)が10%割引になります。
- 関連事業のうち、次の参加費が20%割引
  - ミュージアムセミナー　一般500円、会員400円
    「東京建築展をより楽しむために」　当日先着順受付
    12/9、22、23各回14:30～　江戸博1階会議室
  - ふれあい体験教室「下町建築めぐり」　会員400円
    日時:1/12(土) 13:30～、見学場所:神田界隈
    お問い合わせは、建築展事務局☎03-3626-9974へ

ミュージアム・ショップ特別割引販売
12月6日(木)、7日(金)の2日間
会員の方は10%割引(通常は5%割引)
【ご注意】・書籍など一部に対象除外品があります。
・クレジットカードでの支払いは適用されません。

次号は新年号、12月末発行予定です。

江戸東京博物館友の会会報　第4号
発行日＝平成13年(2001)12月1日
発行＝江戸東京博物館友の会事務局
130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
Tel. 03-3626-9910
編集・制作＝友の会広報部会